

連載コラム



みずき野と
その周辺の
植物と昆虫



第32回

春の野の草花（2）



もとよし ふさお
本吉 總男

2017年4月

本コラムの第11回「春の野の草花」では春に咲く野草の花をいくつか紹介しました。今回は、続編として、まだ述べていなかった春の野の花について書くことにしました。

(1) ショカツサイ

日当たりの良い草むらの中にひときわ目立つ紫の花。ショカツサイです。アブラナ科の植物で、葉がダイコンやアブラナに似ているのでハナダイコン、ムラサキハナナなどとも呼ばれていますが、ショカツサイが標準和名です。ショカツサイの名は三国志の中の主要な人物、諸葛孔明しよかつこうめいに由来するのですが、もともとはカブの別名であったものが、日本ではこの植物の名として使われています(加納喜光『植物の漢字語源辞典』東京堂出版)。



3月下旬 本町地区

中国原産で日本には栽培植物として昭和年代に導入され、その後野生化しました。

(2) シロイヌナズナ

シロイヌナズナは植物学の研究のために、なくてはならない植物(実験植物)です。この植物がなかったなら、現代の植物学の目覚ましい発展は考えられません。医学の研究には、マウスが実験動物として計り知れない重要な役割を果たしてきましたが、植物学にとってシロイヌナズナは、医学研究のためのマウスになぞらえることができます。



4月中旬 5丁目

シロイヌナズナの実験植物としての飛び抜けて優れた特性は、

- 1) 種をまいてから次の種ができるまで、1月半しかかからない。
- 2) 非常にたくさんの種ができる。

- 3) 小さい植物なので、実験室の人工照明の下で多数の植物を育てることができ
る。屋外では高さ30センチほどに成長するが、実験室で育てると、高さは15～
20センチほどである。試験管のなかでも育てられる。
- 4) 主として自家受精(雌しべが同一の花の雄しべから出る花粉によって受精する
こと)によって種をつけるが、他のシロイヌナズナの花粉を使って人為的に交配す
ることも容易で、さまざまな雑種を作ることが可能。上記1)～3)加えて、自家受
精することと交配が容易なことは、植物学の実験に極めて有利となる。
- 5) 遺伝子はDNAの上に存在するが、シロイヌナズナは細胞の中のDNAの量があら
ゆる植物のなかでもっとも少なく、植物の遺伝子の研究に最適。

そのほかにも優れた特徴がいくつかあります。シロイヌナズナ研究史上、最も重要な
出来事は20世紀の最後の年の暮、すなわち2000年12月にそのDNA上に存在す
る全ての遺伝子の構造が明らかにされたことです。それらの遺伝子がどういう働きを
しているかは、その後徐々に明らかにされています。シロイヌナズナで明らかにされた
遺伝子の構造や働きについての知見は、主要な作物の研究や育種にも多大な影
響を与えつつあります。

私もまた、現職時代、シロイヌナズナの研究に関わっていたので、特に親しみをもっ
ている植物です。退職後は守谷市内にシロイヌナズナがあるかどうか注意していまし
たが、約10年もの間、見つけることができませんでした。ところがなんと灯台下暗し、郷
州公民館のすぐそば、「パークスクエア前」バス停近くの道路脇に群生するシロイヌ
ナズナを見つけました。2011年のことでした。

シロイヌナズナは在来種として日本
にもあるのですが、海岸や砂地に
多いといわれており、現在市街地
に生えているものは、外国から来た
ものと考えられています。みずき野
で見つけたシロイヌナズナもおそらく
外来種でしょう。



イヌナズナ 4月中旬 四季の里

シロイヌナズナの名は、黄色い花をつけるイヌナズナに似ていることからつけられたものです。両種とおもにアブラナ科ではありますが、さほど近縁ではありません。

(3) ノヂシャ

ヨーロッパ原産のノヂシャは明治時代に日本に入ったとされています。第2調整池にはたくさん生えています。



4月下旬 第2調整池

ヨーロッパではサラダ用の野菜として栽培されていると図鑑などに書かれているので、ひょっとしたら日本でもと思い、ネットで調べてみました。マーシュという名で販売されている野菜がノヂシャであることが分かりました。料理法もネット上に見つけることができます。ノヂシャは最新の分類ではスイカズラ科とされ、チシャ(キク科)とは類縁がありません。

(4) ムラサキサギゴケとトキワハゼ

ムラサキサギゴケとトキワハゼはよく似た植物ですが、ムラサキサギゴケの方が色が鮮やかで、群がって咲くのでより目立ちます。両種とも在来種で、ムラサキサギゴケは多年草、トキワハゼは1年草です。両種は長い間ゴマノハグサ科の植物とされてきましたが、最新の分類では、ともにサギゴケ科の植物となっています。



ムラサキサギゴケ 4月上旬 第2調整池



トキワハゼ 7月下旬 本町地区

ムラサキサギゴケは第2調整池にたくさん生えています。湿地を好む植物ですが、みずき野周辺のその他の湿地には見当たりません。3月末から4月に咲く季節限定の花です。

ムラサキサギゴケの漢字は「紫^{むらさき}鷺^{さぎ}苔^{ごけ}」。枝が地^はを這い、苔のように地面を覆います。花の形はムラサキサギゴケと全く同じですが、花が白いものをサギゴケ(「鷺^{さぎ}苔^{ごけ}」)といます。花を白鷺^{しらさぎ}に見立てたのでしょう。サギゴケはみずき野周辺では見たことがありません。

トキワハゼは湿地にも乾燥した場所にも見られる植物です。前ページの写真は7月下旬に撮ったものですが、花期は長く、4月から10月まで見られます。漢字では「常盤^{ときわ}黄^は蘆^ぜ」。花期が長いので常盤の意味はわかりませんが、なぜ似ても似つかぬハゼ(=ハゼノキ)の漢字名「黄^は蘆^ぜ」がこの植物の名に入っているのか不明です。

(5) カキドオシ

カキドオシは日当りのよい野原や道端によく見かけるシソ科の多年草です。花が終わると茎が地^はを這って伸びます。垣根を通して庭に入ってくるということから、「垣^{かき}通^{どお}し」と名付けられました。



4月下旬 本町地区

(6) ハナヤエムグラ

第2調整池の北側の土手に咲いていますが、花の直径が5ミリ以下のごく小さな花なので、見落としがちです。右の写真は拡大しています。みずき野周辺ではここ以外の場所で見ることがありません。ヨーロッパ原産のアカネ科の1年草で、日本で



5月上旬 第2調整池

は1961年、千葉県習志野市で初めて発見されました。

(7) ムラサキケマン

林のへりなど、やや日陰の場所によく見られるムラサキケマンはケシ科の在来植物です。ケマンは「華鬘^{けまん}」と書きます。広辞苑には、「華鬘^{けまん}」は「仏前^{しょうごん}を荘嚴^{ない}するために、仏堂内^{じんらんま}陣の欄間などにかける装飾」とあります。ケマンとつく植物には、ケマンソウ、キケマンその他いくつかあります。これらは花の集合が華鬘^{けまん}に似ていることからケマンと名付けられました。



4月中旬 本町地区

(8) チゴユリとホウチャクソウ

この季節、林の中にはチゴユリやホウチャクソウが優しい姿を見せます。以前はユリ科の植物とされてきましたが、最近イヌサフラン科に分類されました。両種とも在来の多年草です。チゴユリはみずき野周辺にはありませんが、城址公園で見つけました。ホウチャクソウは「パークシティ守谷」バス停の十字路より少し先の林の下に咲いていました。



チゴユリ 4月下旬 城址公園



ホウチャクソウ 4月下旬 本町地区

チゴユリは漢字で「稚児百合」と書きます。チゴユリは可愛い花を咲かせる小さな植物なので、その名の意味は自ずと分かります。ホウチャクソウは「宝鐸草」と書きます。「宝鐸」とは、広辞苑には「①仏堂や塔の四方の簷に吊して飾りとする大型の風鈴。風鐸。②銅鐸の美称」とあります。ホウチャクソウの花の形は①の意味が当てはまるように思います。

(9) ジュウニヒトエ

ジュウニヒトエはそれほど多くはありませんが、みずき野周辺の林の中にもたまに見かけます。シソ科の多年草で、在来種です。うす紫の花が重なり合って咲く姿を十二単になぞらえた名称ですが、十二単のように華やかではありません。

よく似た植物にセイヨウジュウニヒトエがあります。北ヨーロッパ原産の植物で日陰を好み、花は濃い紫色です。日本では園芸植物として栽培されていますが、最近では野外で自生しているものもあるようです。右下の写真は以前文化財公園東石垣下に栽培されていたものですが、最近は見かけません。



ジュウニヒトエ 4月下旬 本町地区



セイヨウジュウニヒトエ
4月下旬 文化財公園東石垣下

(10) ワスレナグサの仲間：キュウリグサとハナイバナ

キュウリグサは道端にたくさん生えていますが、花の直径が2ミリほどしかないので、ほとんど目立ちません。でもよく見ると薄紫色の可憐な花です。秋に発芽し、4月頃花が咲く越年草です。

ハナイバナはキュウリグサとよく似た1年草または越年草で、花はごく薄い紫色で直径は3ミリほどです。右下の写真は6月に撮りましたが、3月から12月まで咲く花期の長い花です。漢字では「はないはな葉内花」と書き、葉と葉の間に花が咲くという意味です。

キュウリグサは摘んで揉むと、キュウリに似た匂いがしますが、ハナイバナは匂いしません。両種を識別するにはいい指標です。



キュウリグサ 5月上旬 本町地区



ハナイバナ 6月上旬 本町地区

キュウリグサもハナイバナもムラサキ科の植物で、同じムラサキ科のワスレナグサによく似ています。ワスレナグサはヨーロッパ原産で、日本では園芸植物ですが、野生化もしているようです。可憐で美しいけれども、控えめなワスレナグサは、誰にも愛される植物です。

ワスレナグサ(「勿忘草」)は英語で「Forget-me-not」といい、この名は古い伝説に由来することがよく知られています。最後に、この伝説に関して、植物学者本田正次の文章を引用しておきましょう。



ワスレナグサ 5月上旬 わが家の庭(7丁目)

「ドナウ川のほとりを歩いていた若い恋人同士があった。男は女のために岸辺に咲いていた可憐な花を摘

みとろうとしたが、足を滑らせて急流のなかへ落ちてしまった。それでも男は、摘みとった花を恋人に投げ与えると、『私を忘れないで』という悲痛な叫びを残したまま、うず巻く急流に姿を消してしまった。女はその男の思い出に、生涯その花を身につけていたという」(本田正次『植物学のおもしろさ』朝日選書366 朝日新聞社)。